NO １９３　　２０２２年3月１４日

１学年だより

夢の宅配便

１年学年主任
水野　喜代治

三つ子の魂　NO１５

「三つ子の魂百まで」ということわざがあります。これは、三歳頃までに教えられたことが大人になっても残っているものだという意味です。人の根幹的な感覚である優しさや思いやりなどの相手の気持ちをくみ取る感覚は、３歳ごろの体験と深く関連しているということです。

土曜日に、東京都美術館に行きました。私が通っている書道教室の生徒作品が展示されたので見学に行きました。私の愚作の書画も展示してもらえたので、うれしい気持ちで展示室に向かいました。エレベーターで展示室に行く途中で、エレベータに乗ろうと親子連れが入ってきました。エレベーターのドアが開いて、乗り込む時に、ベビーカーに乗っていた３歳ぐらいの男の子が、急に乗るの拒み「いやいや」と叫びだしました。「どうしたの？乗ろうよ。エレベータに入るよ！」とお父さんが笑顔で説得しだしました。エレベータに乗っている人たちが微笑ましい表情で親子のやり取りを見守っています。「嫌だよ！あっちに行く」と男の子がベビーカーでのけぞりました。その姿がかわいかったので、エレベーターで待っている人も、開くのドアボタンを押しながら笑ってしまいました。「乗ろうよ！乗ろうよ！」と若いお父さんとお母さんが交互にベビーカーをのぞき込んで説得しだしました。エレベーターの奥から「すみません、乗らないでいいですか」と結論を促しました。男の子がベビーカーを足で踏ん張っているので、「乗りませんので！どうぞ閉めてください」と断ったので、エレベータはドアを閉めて、１階に下りだしました。

１階につくと、エレベーターに乗っていたおばあさんが、「あの男の子は、急にわがまま言って、いやいやをしました。みんな仕草がかわいいから笑っていましたが、乗る乗らないで時間をとってみんなに迷惑をかけました。保護者は、もっと毅然とした態度で、子供に接しないとわがままな子供になってしまいます。三つ子の魂百までです。もし、男の子が何か精神的に不安定なものを持っていたなら、最後に保護者は、すみません、うちの子のためにお時間を使ってしまいご迷惑をおかけしました。と一言私たちに言うべきですよね。そうゆうところを子供は物心がまだ身についていませんが見ています。」と私に話しかけてきました。私は、駄々をこねている男の子に腹も立てなかったし、微笑んで見ていた一人でした、ドアが閉まった後にエレベーターの中で、何か釈然としない飲み込めないような感覚が自分の中にありました。それは、保護者が「ご迷惑かけてすみませんでした。」という一言がなかったからだとおばあさんの話を聞いて思いました。このような気遣いができるかどうかで、三つ子の魂の色が決まるのだと思いました。